

『弁慶物語』諸本についての一考察

―写本類を中心に―

田代圭一

一 はじめに

室町時代を中心に作られた「お伽草子」と称される物語群は多様なジャンルの作品が多く存在し、これまでも内容に応じて諸作品の分類が試みられてきた。市古貞次氏の分類による「武家物」⁽¹⁾と称される作品群には軍記物語との関連を持つものも多く、中でも源義経や武藏坊弁慶は様々な作品に登場し、人気のほどが窺える。筆者はかつて、『弁慶物語』諸本についての一考察―刊本類を中心に―と題して『弁慶物語』諸本のうち、古活字本や版本といった刊本の系統分類を試みたが⁽²⁾、本稿はそれを承ける形で写本類の分類を行いたい。多くの作品に異本を持つお伽草子において、諸伝本の整理は重要な基礎作業である。『弁慶物語』の写本類は刊本類に比べ、本文異同も多く、分類は容易ではないが、各本を慎重に比較することによって浮かび上がるさまざまな差異を明らかにしていくことは、作品研究や当時の伝承を探る上でも有益となろう。また、奈良絵本や絵巻といった種々の形態による伝本があることから、書誌学的観点からの考察を加えていくこともお伽草子研究の一助になると思われる。本稿ではこれらを踏まえ、『弁慶物語』写本類の

伝本整理を試みていきたい。

二 諸本と先行研究

現在のところ確認できた『弁慶物語』の伝本は次頁の通りである⁽³⁾。この表は松本隆信氏の「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」⁽⁴⁾に、筆者の増補改訂を加えたものであり、便宜上、人名表記は「弁慶」に統一した。以下、写本類の先行研究を略述するが、翻刻書や年次は一覧表を御参看いただきたい。また刊本類の翻刻紹介や研究の軌跡については前稿に記したのでここでは改めて触れない。

写本類の紹介は藤井隆氏の穂久邇文庫蔵「武藏坊弁慶物語絵巻(仮題)」(一覧表¹、以下大字は一覧表の諸本番号)の翻刻・考察に端を発する。藤井氏は「本絵巻の書写年代は書画風・料紙より見て室町時代の中期を下らなものである」として現存最古の伝本と位置づけ、刊本類と大部分の本文が一致していることも指摘している⁽⁵⁾。

下房俊一氏は「島大国文」⁽⁶⁾中の「古活字本『べんけいざうし』について」において複数の諸本の考察を行っている。その中で天理図書館奈良絵本

『弁慶物語』諸本一覽 (*印は未調査)

【刊本】

番号	書名(外題)	頁数	刊写年代	形状	所蔵者(機関)名	備考(翻刻など)
①	弁慶物語	二冊(上下)	慶長頃	古活字	大東急記念文庫	大東急記念文庫善本叢刊近世篇一『仮名草子集』(汲古書院、昭和五一年、解説中村幸彦氏)に影印 大友信一氏、木村晟氏『弁慶物語』(桜楓社、昭和六一年)に翻刻
②	弁慶物語	一冊(上下)	慶長元和頃	古活字	東京大学国文学研究室・龍門文庫(下)	東京大学国文学研究室蔵本は有補写、平出堅一郎氏『室町時代小説集』(精華書院、明治四一年)に翻刻
③	弁慶物語	二冊(上下)	元和寛永頃	古活字	慶応義塾大学図書館	横山重氏・松本隆信氏『室町時代物語大成』一二(角川書店、昭和六一年)に翻刻
④	べんけいさうし	二冊(上下)	元和寛永頃	古活字	島根県某家	下房俊一氏『島根大学文学部紀要』〇・一一(島国文学会、昭和五一年二月・五二年二月)に翻刻
⑤	弁慶物語	一冊(上のみ)	江戸初期カ	版	早稲田大学図書館	端本(巻頭巻末欠、丹録本)
⑥	弁慶物語	二冊(上下)	慶安四年	版	国立国会図書館・東北大学図書館(※)	横山重氏『室町時代小説集』(昭南書房、昭和一八年)に翻刻
⑦	弁慶物語	二冊(上下)	貞享二年	版	東京大学文学研究室(※) 京都大学文学研究室(※) 国立国会図書館・彰考館	(※)印は無刊記後印本 河内屋理兵衛刊

【写本】

一	武藏坊弁慶物語絵巻(仮題)	一軸	室町後期カ	絵巻	懇久邇文庫	藤井隆氏『未刊御伽草子集と研究』一(未刊国文学資料刊行会、昭和三二年)に翻刻 上巻巻末・下巻末、中巻最終丁は大谷与平次による補写(中巻表紙も同筆と見られる)
二	弁慶物語	二冊(上中)	室町末・江戸初	写	東京大学国文学研究室	『在外奈良絵本』(奈良絵本国際研究会編、角川書店、昭和五六年、担当徳江元正氏)に影印・翻刻 新日本古典文学大系五五『室町物語集』下(岩波書店、平成四年、担当徳田和夫氏)に翻刻
三	武藏坊絵巻起	三軸(上中下)	室町末期	絵巻	チエスター・ビーター図書館	残欠
四	(書名未確認)	一軸	室町末期	絵巻	ハーバード大学附属フオグ美術館	『明治古典会七夕入礼会目録』(明治古典会、平成七年)に一部写真掲載、もと絵巻カ
五	弁慶物語	五軸	室町末期	写	大阪青山短期大学	『思文閣古書資料目録』善本特集 第二輯(思文閣出版、平成二年)に一部写真掲載、解題
六	弁慶記	三軸(仁義札)	室町末期	絵巻	大阪青山短期大学	『古典籍下見展観大入礼会目録』(東京古典会、平成三年)に一部写真掲載
七	弁慶物語	五冊	江戸初期	奈良絵本	大阪青山短期大学	『大阪青山短期大学所蔵品目録』第一輯(平成四年、担当松浪久子氏)に一部写真掲載、解題
八	弁慶物語	一冊(上下)	元和七年	写	国立国会図書館	『明治古典会七夕入礼会目録』(明治古典会、平成八年)に一部写真掲載
九	弁慶物語	二冊(上下)	江戸初期	写	天理大学附属天理図書館	『室町時代物語大成』一二に翻刻
一〇	弁慶物語(*)	三冊(上中下)	江戸初期	奈良絵本	天理大学附属天理図書館	国籍類書本第三・三三冊、『山邊道』二八(天理大学国文学会、昭和五九年三月)に翻刻
一一	弁慶物語	一冊(上下)	江戸初期	写	京都大学国文学研究室	池田敏子氏『京都大学国語国文学資料叢書』四『弁慶物語』京都大学蔵(臨川書店、昭和五四年)に翻刻
一二	弁慶物語	一冊(下のみ)	江戸初期	奈良絵本	京都大学附属図書館	右書に影印収録
一三	弁慶物語	一冊	寛永二〇年	写	東京大学文学研究室	『日本古典影印叢刊』二七『室町物語集』(日本古典文学学会、平成二年、担当市古貞次氏)に影印
一四	弁慶物語(*)	二冊	江戸初期	写	山口大学附属図書館	徳山毛利家旧蔵
一五	弁慶物語	三冊(上中下)	江戸初期	奈良絵本	井田等氏	工藤早弓氏『奈良絵本』下(京都書院、平成一〇年)に写真掲載
一六	弁慶物語	五軸	江戸初期	写	石川透氏	石川透氏『室町物語影印叢刊』一〇『弁慶物語』(三弥井書店、平成一四年)に影印、もと絵巻
一七	弁慶物語	一軸	江戸初期	絵巻	慶応義塾大学図書館	『思文閣古書資料目録』第一九号(思文閣出版、平成二年)に一部写真掲載
一八	弁慶物語	二冊	江戸初期	奈良絵本	大英図書館	残欠、『古典資料研究』第五号(平成一四年六月、担当石川透氏・大月千冬氏)に翻刻、挿絵写真掲載
一九	(外題ナシ)	一軸	江戸初期カ	絵巻	東洋文庫	絵のみ(残欠・詞欠)
二〇	へんけい物かたり	二冊(上下)	江戸中期カ	写	岩瀬文庫	石川透氏『西尾市岩瀬文庫御伽草子・奈良絵本解題図録』(平成一五年)に一部写真掲載

(一〇)・京大図書館奈良絵本(一二)は刊本系本文を持つこと、国会図書館元和七年写本(八)は刊本類に比して本文・内容は異同甚だしく、異本として扱うべきであると主張している。

池田敬子氏は京大国文学研究室本(一一)を翻刻し、単独異文の多さや主として弁慶像に見られる構想上の独自性を指摘している。多くの写本類諸本の詳細な考察も行い、本稿もその御論に負うところが多い。同書には併せて京大図書館奈良絵本を影印で収載している。

チェスター・ビーター図書館絵巻(三)は徳江元正氏によって翻刻され、影印も掲載されている。徳江氏はこの絵巻を室町末期の書写と推定しており、改めて同絵巻が「新日本古典文学大系55 室町物語集 下」の底本として収録されるに際し、解題を記した徳田和夫氏も同様の見解を示している。

今西實氏は天理図書館蔵国籍類書本(九)を翻刻し、諸本も含めた考察を行っている。今西氏は当該本を「文飾や叙述の繁簡など全般的に、チェスター・ビーター図書館蔵室町末江戸初期間の奈良絵巻『武蔵坊絵縁起』三巻の本文に最も共通度が高く、両本はもと同系の伝本から出たものであろうかと考えられる」と述べており、フォグ美術館絵巻(四)についても独自の趣向が見られる旨も記している。

国会図書館元和七年写本(八)は『室町時代物語大成 一二』に翻刻された。冒頭解題の諸本分類では東大国文学研究室寛永二〇年写本(一三)が大東急記念文庫本(①)と同系統、つまり刊本系であることが加えられている。近年では石川透氏が御自身御所蔵の卷子五軸(一六)を影印で刊行し、解題で刊本系本文を持つことを記している。また、大月千冬氏との共著で慶応義塾図書館絵巻(一七)を翻刻・考察、さらには岩瀬文庫本(二〇)に解題を

付すなど、諸作品を含め精力的に収集、紹介を行っている。

お伽草子の作品数の多さに比して翻刻や影印、あるいは注釈の施された作品は割合的にまだ高いとは言えない中、『弁慶物語』についても同様のことが言える。本稿でも先行研究を踏まえながら改めて検証を加え、現時点で可能な限りの系統分類と作品の特質を探っていききたい。なお、本稿で取り上げる諸本は刊写年代の特定が確実でないものもある上、冊子や卷子本等、多様な形態を持つ。ここではそれらを便宜的に所蔵者(機関)名により「本」と表記し、同一の所蔵にあるものには形態等も記すこととする。また、本稿における本文引用は特に指定のない限り国会図書館本(八)により、常用字体を用いた。引用中の傍線や空格は私に施したものである。

三 刊本類と写本類の本文について

『弁慶物語』において考察の対象を写本も含む現存伝本全体に広げた場合、まず挙げられることは、写本系統の本文と刊本系統の本文との大きく二つの系統に分けられるということであり、顕著な例を末尾対校表一に示した。物語の進行としては双方に大きな違いはない。本文の叙述のみならず、オに見られる「ろんく」・「くれんく」や「念珠さらく」などの擬声語も写本類では共通していることが見て取れる。引用は割愛するが、他に弁慶自戒の場面や渡辺館での場面展開等に違いが見られる。

作品の特質に着目しても両者の違いが見られ、刊本類の弁慶像は総じて個性的に描かれている。誇張的な表現を用いつつ滑稽にも描かれ、読者の笑いを誘う表現は写本類に比べると際立っている。比叡山での狼藉を注意しよう

とする師匠慶心（写本は慶俊）に対し、刊本類（大東急本）は

ちこは人のけしきをみては大のまなこにかとをたてて見いたし ほうほ
ねあれ ちすしきしあらわれ ときくのはかみをしてにらまる、間
ししやうなれともよりかねてそましくける

とある。師匠の訓戒に対し、弁慶は再び

ちこは是を聞給ひて さてはそれかしをにくみての給ふそこころへて
さらは一おとしおとさはやと思ひて ほうほねをいからかし ちまなこ
になり

と敵対感を顕わにする。対する写本類は「さ承り候ぬ」と、実に淡白な対応である。この部分は刊本類との関係が想定される穂久邇本には見られず、刊本系本文の生成にあたって作られたものと言えるかもしれない。同様に後半部においても、平家に捕らえられた師匠の身代わりになる場面での

其きならはけいこのふし共一々にふみころし はらをきるへし 御きさ
ん候は、なわをかけられ六はらへゆかんとて はかみをしてたちける
は いかなる四てん八てんのあらつくりといふとも これにはすきしと
そ見えたりける

という姿は先の弁慶像と通じるものがある。清水寺での義経との対決では
大のほうしのはらまきに大きくそくとりつけ をもひの外にたふれければ
くんしゆのうへにふしか、り おほ（く欠）の人おをしふせて かたは
になる物とおほかりける

とある。ここには人間離れた強さにユーモラスな一面が付け加えられている。「あのをそろしきにしてもなみたは有けるよと あはれなからもをかしか
りけり」や「そもく此けいしんはいつくへ行給ふそといへは こしかき共

おそろしきにふるひく六はらへといひければ」という部分も同趣の表現と
言えよう。

その他、刊本に特徴的なことは、重盛の聖人化された人物描写である。兵法を用い、姿を消した義経の接近を見抜き、その義経をして重盛はかなわぬと観念する様子が大東急本では二丁にわたり記されている。こうした重盛像は「平家物語」にも見られ、佐谷眞木氏も「古活字本『弁慶物語』は、『平家物語』の論理を取り込むことで記述されている」と説くように、⁽⁹⁾「平家物語」が刊本系本文の生成に利用されているようである。

一方、写本類の特徴としては仏教色が色濃いことが挙げられる。対校表では一のウ・エ・オ、二のイ・ウなどが該当する。仏教用語を随所に散りばめ、榮啓期や雪山童子の故事を引くなどの手法も用いている。他にも「かへつて仏意にかないなん」・「もし仏意にやそむくらん」・「仏に申たるいさかい達せぬ事こそ無念なれ」・「弁慶か芸能なればいさかい仏にみせまいらせん」といった意識が写本類に共通して見られる。これらは弁慶の行動であり、刊本類とは対照的に、信仰心厚く、博識な弁慶像が読み取れるのである。後に平家一門を「朝恩にのみ誇て修善のいとなみさらになし（中略）いよく仏のためにとをさかり ますくむけんの罪業をまねくのみこそ無ざんなれ」ととらえ、「じやけんほうるつもの人の太刀ばかりをうばいて」という行動とつながろう。対校表二のイ「弁舌利口の上手成ければ」や「本より内典外典の学匠なる間 唐土天竺日本の物語虚言実云程に」等も一連のつながりと見なせ、そのことは広く根付いていた説経等、当時の時代性と関わりがあるかもしれない。

四 諸本の考察

(一) 東大本と国会本について

以下、それぞれの写本についての考察を進めていくが、まず注目すべき伝本は東大文学研究室本（東大本）である。本書を紹介した池田敬子氏は「管見に入った『弁慶物語』諸本の内、最古のものは天正十一年の年号を含む書き入れを有し、それよりあまり下らぬころの写本である東京大学国文学研究室蔵本」と述べている。当該本を披見したところ、形態的にも書き入れの年号と齟齬はなく、伝本の中では最も古い部類に属するものと言えよう。池田氏によると、写本類は東大本と国会図書館本（国会本）がほぼ同文関係とのことであり、写本類についてはまず東大本と国会本の考察を進めていく方法が適当なようである。

対校表二に示すように、東大本と国会本は共通の本文が顕著であり、同系統とするに支障はない。東大本は上巻巻末部と下巻を欠くが、現存する箇所は国会本との近似性は続いていることから、欠脱箇所も同様であろう。しかし細かく検討すると、対校表三のように明らかな異同も見られる。

また、東大本には異本の注記が見られる。特に中巻の「ホンノマ、ニウツシ申候也 イ云弁慶者花叢経六十巻全部書写ノ誦学性也」という注記は異本の存在を示す根拠となろう。その内容も写本類に特徴的な仏教色が反映され、前項で触れた写本類の弁慶像と重なるものがある。この注記を持つ本文は現存伝本に見られないが、この当時、既に『弁慶物語』の諸本が複数作られていたことが確認されることで大変に興味深いものである。

写本類における位置付けを試みるならば、両本の本文の系統が写本類の中では古態を持つということになろうか。左のように本文の上からも、室町後期には製作されていたであろう穂久邇本（後述）との本文に一致を見い出せることから、そのことは補強される。

◎穂久邇	よほうびさうにて御入	候	三日になるはな女ばう也
CBL	ことわかひさうにて	候	三日になる事なれば
天理	ちかころひさうにて御さ	候	
東大	如法 美僧 にてまし／＼候		三日になる花女 房
国会	如法 美僧 にて御わたり候		三日になる花女 房
青五	よほうひさうにて御わたり候		三日になるはなによほう
青三	ちかころひさうにて御座	候	三日になるはなにあひなれたる女房
京大	ひさうにて御り	候	三日になるはなによほう
岩瀬	よきほうしにれたるや		三日になる ふうほう

伝承的な観点から付け加えるならば、「奥州夷が島へ渡り給ひて 隠形の方法を習ひ給ふ」という、義経島渡り伝説が見られる。こうした伝承は『御曹子島渡り』にもあり、当時は知られていたと思われるが、『弁慶物語』諸本の中では両本のみに見られる。東大本系の本文が生成されるにあたって取り込まれたものと言えるかもしれない。

(二) 大阪青山短大本について

大阪青山短期大学には先に触れた奈良絵本の他、三巻（六、大阪青山三巻本）ものと五巻（五、大阪青山五巻本）ものの卷子本を所蔵する。前者は図版と解題（一覧表参照）が付されているが、後者についての考察は今のところ

ろなされていないようである。双方とも縦三〇センチ超の、風格を感じさせる豪華な装訂は、貴頭の要請に応じて製作されたものであろう。

大阪青山三巻本（対校表は「青三」と表記）は『大阪青山短期大学所蔵品目録 第一輯』解題によると慶長頃写とある。本文書写の際に目印とした針穴が行の上下に見られることなど、その頃製作された特徴を持つ。もとは仁信の五巻だったよう⁽¹⁰⁾で、第二・三巻の題籤には「弁慶記 義」・「弁慶記 札」と墨書されている（巻四・五欠。第一巻は後補表紙力）。本文系統は対校表一・三に見られるように写本系で、中でも東大本の本文に近いことが認められる。表一のイや三のイには単独異文も見られるが、物語展開の上から外れることはない。本書の製作の際に独自の潤色を加わったものであろう。

一方、大阪青山五巻本の現状は詞書のみ巻子本で、第一巻は巻頭を欠く裏の継ぎ目に「三」―「五五」漢数字が随所に書き込まれていることや継ぎ目が汚れている箇所もまま見られることから、もとは絵もあつたと思われる。第五巻巻末に本文と別筆で「右弁慶物語五卷天正年間中ニ太守様より給候藤原氏」という書き入れがあり、同筆の書き付けも存する。江戸時代以降に製作された奈良絵本・絵巻に特徴的な文末（特に絵の前）に散らし書きが見られないことなどからも、本書も現存する伝本の中では東大本と並ぶ古い部類に属すると言えよう。

対校の結果は国会本とほぼ同文関係にあり、そのことは対校表三や以下の例から確認される（「青五」と表記）。細かい語句や、文章が存在しない箇所も共通しており、東大本と国会本以上の共通性が確認される。書誌学的加點から、書写年代は大阪青山五巻本が国会本に先行するとみられる。

国会 鐘をあの正面の左の柱 あそこのすみこ、の廻廊

青五 かねを あのしやうめんのひたりのはしら あそこのすみこ、のくわいらう

東大 大鐘を あの正面の はしら あそこの角こ、の面廊

京大 大かね あのしやうめんの はしら

岩瀬 大かね あせうめんの はしら

国会 根本 中堂へ御入堂 候へとて さきに追立て

青五 こんほんちうたうへ御にうだう 候へとて さきにつたてて

東大 中堂へ御入堂 候へとて 先においたて、

京大 中たうへにうたう したまへとて さきにおつたて まいりける

岩瀬 ちうたうへ をつたて まいり

しかしながら大阪青山五巻本と国会本の親本が同じであるとか、直接の書承関係にあつたとまでは言いきれない。東大本・国会本が「有為の財に着して」とあるところを大阪青山五巻本は「ういのたからにあらはして」と書かれている。これは大阪青山の親本が「著して」とあることからこうなつたと思われ、両者の親本が同一ではないことの傍証たり得よう。

本書で最も注目すべき箇所は次の場面である。義経と弁慶の三回目の対決であるが、

東大 合戦 はいつくそ御房と仰ける 六条河原こそよく候へと申（中略、次行へ）

国会 合戦 はいつくぞ御房 六条河原こそよく候へと申す

青五 かつせんはいつくそ御ほう 六条かはらこそよく候へと申す

東大 清水辺に山さかしくして石そはたてり ちともふみはつさは身はないり（次行へ）

国会 清水辺に山険しくして石そばだて ちつとも踏 はづさは身は奈利

青五 五条のはしにつき給ふ

東大 へもおち給へき在所を こ、こそよけれ御房よとの給ふ

国会へも落ぬべき在所を爰こそよけれ御房よと宣給ふ

青五

とある。二人の合戦の場所が大坂青山五巻本では五条橋となっているの対し、東大本・国会本はほぼ同文で清水周辺の峻険な地となっている。大坂青山五巻本と国会本の一致度の高さに比してこの違いは際立っている。ここは大坂青山五巻本が製作されるに際し、五条橋対決を記す別の親本に拠つたとする場合と、書写の過程で書きかえたとする場合とが考えられよう。しかし、大坂青山五巻本と国会本との一致度の高さと、作品全体としても東大本と国会本は同系と言えるこれまでの経緯から、ここは後者によると見なすのが妥当であるように思う。この推測が正しければ、さまざまな展開を見せる諸本が生成されていく様子が窺える好例とも言えよう。

(三) 京大本と岩瀬本について

次に京大国文学研究室本（京大本）と岩瀬文庫本（岩瀬本）の考察に入る。両本共に形態的な面からも江戸時代に入ってから書写とみられているが、ここでも対校結果を踏まえて論を進めていきたい。

池田敬子氏は自戒の場面から「『絵巻』との関わりでは、京大本、岩瀬本が部分的字句で一致を見せるところがあり、二本の由来を考えるに興味深い手がかりとなるかもしれない」と述べ、穂久邇本との関わりに注目している。しかしながら、対校表一からも、写本類は共通した本文を多く持ち、穂久邇本との「部分的字句」程度の一致にとどまらない。親本の特定には至らなかったが、どちらかというところ、東大本との関わりをより重視すべきであり、直接の書承関係とまでは言い切れないが、両本共に東大本系の本文から生成し

たものと言えよう。

その中で両本に共通して言えることは、第一に比較的長い単独異文がそれぞれに見られること。第二に東大本・国会本・京大本、あるいは東大本・国会本・岩瀬本という共通した本文が見られることが挙げられる。このことは端的に言えば両本に写本類の祖本的性格はなく、それぞれの書写の際に増補が加わり、仕上げられたと考えるのが自然であろう。対校表一のア・ウ、三のア（以上京大本）、一のア・ウ・エ（以上岩瀬本）にも部分的に独自の表現が見られるが、以下にそれぞれの顕著な例を挙げる。

（京大本）

「ア」（比叡山を去る場面）ししやうこのよし御らんして なふいかにやく一殿 けふよりのちはあくきやうをおもひと、まりまし／＼て二たひすかたを見せ給へ ちきるなかなければちたひなしけれとわかつてふてんたいさん三こくのめいさんをやふらん事のかなしさにか、るうきめを見るそとて 見おくり見かへし たかひになりをおしみつ、 なみた共に御わかれあわれといはぬ人なし

「イ」（飲酒戒の場面）ほとけもおもひあやまれる さけには人の心とけうときにもちかつく したしき中はなをしたしく あくの心をひるかへし よろこひのまゆをひらきつ、 わよの中たちこれならん 人けんの八つのくをうくる事 みな心よりうくるなり 心たのしむさけなれば 八くをのかる、さけなるを おんしゆかひとてきんたんす いかにまかへていましためけん またせんしやうのたしなみはあつきもさむきもいとはず 一はいのふてはきをいさめ ゆきこほりをもきはらず 思ふかたきをうつなれば

また、長文により引用は割愛するが、平泉寺から書写山への旅の道行文は歌枕を読みこむ七五調の文体で、天橋立では歌を一首詠む箇所も京大本独自の文章である。

(岩瀬本)

〔ウ〕(渡辺館に強盗侵入の場面) たちかたなもうちすて □いせよをさしてわけ入れたれば ぬす人もよろこひ 物のくをひろいとり そのひまにはやもんのくわんぬきさらりとさし ちびをちやうどさす

〔エ〕(平泉寺にて) 弁慶かきとくには すまんきのむしやをも一めみわたして あのむしやは心かうなるよ 此むまはよしあしと 此くそくはいかやうなると やかてみしる事きどくふしきなり

〔オ〕(同) しらぬていにてかのほうしをほうちと、めざるかな きしんにてはよもあらし いかにやきりやうのものなりとて 大しゆいてあふものならば かならずうちと、めんとさ、やく所へ

等である。岩瀬本が東大本の展開から外れることはないものの、京大本は弁慶像の造型に特徴が現れている。既に池田氏も指摘しているが、そこには人間としての情をもった弁慶が描かれており、「ア」に示したように師匠との別れも感傷的に描かれている。出家の場面では写本類の他本が「法師にならんと思へども あまりに人ににくまれてかみをろすべき人ぞなかりける」とあるところを京大本は「それともししやうへ二たひたちかへりて申さん事もはつかし たれをかたのまん」という単独異文になっている。京大本には「にくむ」という評語がなく、師匠を意識する筆致が見られることもそうした趣向と無関係ではないだろう。

(四) チェスター・ビィティ図書館本について

チェスター・ビィティ図書館本(CBL本)は、

A. 渡辺館にて、以前弁慶の武具を作った職人分の賃料としての金品獲得や強盗退治など

B. 平泉寺と書写山での争論

C. 弁慶の師、慶俊を平家が捕らえること

D. 吉内左衛門が弁慶から義経の居所を聞き出そうとするが、失敗に終わること

の四つの場面が欠脱しているが、現存する本文も対校表一―三に見られるように、大筋で写本類共通の本文を持っている。東大本系本文との関わりは25頁◎印の引用からも追認できよう。「ことにわかひさう」は「如法美僧」の崩れた形であろうか。しかし比較的長い単独異文も多く、話の展開も全般的に独自性が強い。

まず義経と弁慶の出会いについても、東大本等は弁慶が書写山へ寄進を思い立ち、24頁にも触れたように仏道に励まない平家の太刀を奪うということから辻斬りをしている場に義経が遭遇する。そこに至る長い経緯が東大本では三丁、国会本では二丁にわたって記されるのに対し、CBL本は鞍馬から現れた天狗(義経)が辻斬りをするという逆の展開である。『じざり弁慶』も同様のパターンであり、こうした話型の流入であろうか。二回目の出会いでは対決することなく義経を見逃してしまうことや、二人の対決時点で、義経はまだ元服前と思われることも大きな違いである。^[1]

他にも同本は他作品や当時流布していた伝承などの関わりを想起させる箇所がある。対校表四のウ「むかはすこしそりいて、いろしろくて」という

義経の容貌は、同様の表現が『平家物語』・『義経記』等に見られる。また、初回の対決で義経が用いる兵法を他本は「飛行自在の術法」としているのに対し「こたか（小鷹）のほう」と明記している（天理図書館国籍類書本（天理本）も同様。天理本との関わりは次項で触れる）。この名は東大本等には見られないが、『御曹子島渡』や幸若舞曲『烏帽子折』等の他作品には見られる。義経を連れ帰った「九条御所」は謡曲「橋弁慶」に見られる。さらに表四の工傍線部の、義経が僧正が谷で武芸の修行したという伝説は『平治物語』では本書のみに見られるが、『太平記』の一節に見られる他、『平治物語』・幸若舞曲『未来記』・『実隆公記』・『翰林葫蘆集』にも見られ、室町末期までには広く知られていたようであり、こうした巷説も取り入れられていると考えられよう。⁽¹³⁾

加えて、当時の諺や言い回し表現が多く使われている。例えば（便宜上、通行の文体に直した）「あつばれ金子や よき金子 あつばれ上手や よき上手」・「衣裳にものを与ふるかな」・「籠の内の鳥 網代の氷魚の如くにて」・「弾に慣れたる鳥の風情」・「木に離れたる猿」などである。⁽¹⁴⁾その他、六波羅殿にて清盛との対面の場面で、弁慶が「上へとはたれぞ」とあるところを「かみとはなにそ いせかくまのか」と皮肉まじりに切り返していることも興味深い。親本によるものか、CBL本の親本が「かみ」仮名書きであったのかあるいは「上」からの連想であったか知るべくもないが、いずれにせよ場面展開を豊かにしていることは確かである。

以上から、東大本等の諸本がこうした要素を削ぎ落として編まれたというよりは、CBL本が親本から分立し、広く外の情報を取り入れるなどして、独自の生成を遂げたと思ふのが自然であろう。当時広まっていた伝承や言

い回しなどを確認できる点というでも、本書は価値的と言える。

(五) 天理本とフォグ本について

天理本とフォグ美術館本（フォグ本）はCBL本との関わりが認められるが、天理本に関しては既述のように今西實氏が詳細な考察を行っている。まづ、国籍類書本という書籍群について今西氏の稿を引用する。

出雲・隠岐の領主堀尾忠晴の女が伊勢亀山の石川家に嫁した時の、嫁入り本として作成されたものかという。主として古典文学関係の小型本叢書二八〇帖で、すべて元和より寛永前期の書写編輯かと考えられている。本書もまた対校表一に見られるように、大筋で写本類としての共通本文を持っており、写本類の一伝本として見なしてもよいかと思われるが、その物語展開は大きな独自性を見せている。再び今西氏の言を借りると

自刺自戒条では戒壇の暴挙を省き、太刀具足調達の条では、それぞれ遁走の経緯を著しく略述し、渡辺館での条も、藏をあげさせる部分を省略、強盗の密談を聞くことや、小松殿より恩賞を賜わる件等は全略している。また書写炎上後の内裏奏上の件や、二度目以降御曹子との邂逅、巻末の御曹子再会以後の条等にも省筆が見られるのである。

と述べ、「全篇的に伝説内容に省略化を加えてあら筋をたどる傾向ををもった、諸本中最も構想の簡潔な伝本」と位置づけている。本稿においても今西氏の論域を出るものではないが、若干の私見を加えていきたい。

本文を検するに、対校表一、表二のウ、表三のアの他に

東大 あひのひしをいかくとほらせて

天理 あひ にいがくとほらせて

からも、天理本と東大本系本文の関わりは否定できるものではない。

しかし、23頁において今西氏も既に指摘しているように、後半部、特に義経との対決以降はCBL本との共通性が顕著となってくる。対校表四はそうした箇所を引用したものであり、ウ以降はCBL本と天理本のみに見られる共通異文である。そのウに見られる、太刀の値踏みの話は両本の他には見られず、二本にのみこうした共通の展開が見られることもまた影響関係を雄弁に物語っている。伝承的な面からも、表四オの傍線部にある、鏡の宿での義経の元服を記すのは天理本のみである。この伝承は『平治物語』・幸若舞曲『烏帽子折』等に見られる。

これらを勘案すると、天理本の本文形成には複数の本文の混態に加え、省略化などの独自の改変と世間に流布していた巷説も取り入れたと言えようか。混合の経緯に関しても、前半部は主として東大本系統、後半はCBL本と、巻ごと、場面ごとに応じた生成や、親本の有無といった物理的な事情に起因する取り合わせとも考えられる。このことは『弁慶物語』全体に関わる問題とも言え、今後、更なる検討を期したいが、現存する諸本の中でも注目に値する一伝本と言える。

もつとも、天理本はそれのみで論じ尽くせるほど事情は簡単でないように思われる。当該本は国籍類書本という書籍群の一であり、天理本の解明にはこうした側面からの考察も必要であろう。国籍類書本の中には他にも特異な本文を持つ作品の存在も指摘されており、その全体像の解明も待たれるところである。

フォグ本は残欠本であり、錯簡も生じているが、結論を先に述べると、同本はCBL本の一部、つまり欠脱している部分にあたる。CBL本の数カ所

(28頁A・Dの部分)が何らかの事情で切り離され、繋げられたものがフォグ本ということである。図版として双方を掲載できないのが残念だが、それは以下のことから裏付けられよう。

フォグ本に存する部分は本文・絵共に物語展開上でCBL本に欠けている箇所である。内容的にも重複がなく、CBLにない場面をフォグ本によって埋め合わせられる関係になっている。そのフォグ本はCBL本と書風・画風が一致し、同一人物の書・画になるとみても差し支えない(現在手持ちの資料では寸法確認までは至らず)。一行三〇字前後の流麗な書風は双方共に通し、画については弁慶が武装した姿は両本共に同じである他、人物の目を大きくユーモラスに描く特徴的な技法も共通しており、異時同図法も両本に見られる⁽¹⁶⁾。

また、本文の面から手がかりとなり得る箇所を対校表五に示した。これらは後半部の、特に天理本との本文が近くなってからの部分であるが、本対校表四に見てきたようなCBL本との一致を思わせる。以下も二本のみに見られる共通異文である。

類書 あわれとくしてへいけをうちしたかへて世にいて このわんれいをせはや

フォグ あはれとくしてへいけをうちしたかへ よにいて このわんれいをせはや

類書 た、きけんこそ御さかなにて候へと 大さかつきにてさしうけく(次行へ)

フォグ た、きけんこそ さかなにて候へとて 大さかつきにてさしうけく

類書 十はいはかりのみてのち

フォグ 十はいはかりのみてのち

以上から、フォグ本はCBL本の一部であることが確認されよう。両者を合わせることににより、CBL本の考察の更なる進展を期したい。

(六) 穂久邇本について 付 刊本との関わり

穂久邇文庫本は先行研究でも触れたように、藤井隆氏によって早くから紹介され、諸本の中でも最古のものとされている。藤井氏は「室町中期を下るものではない」と述べているが、近年の研究では奈良絵本・絵巻と称される、お伽草子を主とした絵入りの作品群は室町時代後期頃から製作されたと考えられている。素朴で簡潔な画風の、画中詞を持つ本書もこの頃製作されたと思われる。本書は巻頭部を欠くものの、全巻を通じて一筆の手になる。料紙の継ぎ目にも絵や本文がかかっていることから、本文や絵を描く前に紙を継いでいることがわかる。本文は絵の余白を埋めるように書かれ、絵の上に字がある。これは料紙を貼り継いだものに本文を書き、適宜絵を間に入れたり書き進めていったと見なす場合と、先に絵のみを描き、後で本文を書き込んでいったとする場合とが考えられようが、絵が物語の進行とズレを生じておらず、後者の場合はそこまで緻密に絵の配置を計算していたかとするにも疑問があり、ここは前者によるとしたい。

本書の素朴な画風は専門の絵師による製作と思えず、自在に詞書と絵を入れ交ぜていることから、詞書と絵は同一人物による可能性も指摘しておきたい。藤井氏は本書を『看聞日記』永享六（一四三四）年一月六日条に見られる「内裏物語御用之由被仰下之間、（中略）武藏坊弁慶物語二巻献之、」の内容を伝えるかとしているが、本書が一卷であることや同記永享九年七月一日九日条には義経・弁慶の清水での対決が知られていたことが伺えること（本書は五条橋）、さらには禁裏には能書や絵師などに製作させる等、しかるべき物を献上するはずであるから、そういった伝来の経緯も勘案すると、その判断には慎重にならざるを得ないだろう。これらの裏付けには更なる慎重な

検討を要するが、本書は奈良絵本・絵巻の登場した当初の製作事情の一端を窺い知る上でも価値的な資料と言えるものである。

本書の前半部、具体的には渡辺館での強盗退治までが刊本系本文と近いことは既に触れた。藤井隆氏も前掲書において具体的に論証し、筆者も前掲対校表で多く例示している。ここでは改めて例示しないが、本稿においては対校表一のア・イがそれにあたる。また、他諸本との関わりについても、本書は諸伝本の中でも最古の部類に属することや、「べんけいいうけとりか、る御心ざし申つくしがたし このこそでみなになり候はゞ 又こそ申候はんずれとて きやうへこそそのぼりけれ」という画詞が他本では本文化されていることから、穂久邇本は諸本に先行する本文を持つと言えよう。⁽¹⁷⁾ 25ページ◎印の引用に示すように、写本類とも何らかの関係があった可能性が認められる。

しかし、後半部の義経との対決以後、奥州下りと衣川の戦いが簡潔に描かれるなど、後半部は他諸本と展開を大きく異にする。「翻字二十四頁のうち、二十頁ぐらいまでは後述古活字本と似ているが、辻斬りする男（義経、筆者注）と出逢い家来になること以下高館での最期までが、終わりの四頁に収められており、いかにもあわただしく均衡を失っている。何らかの事情でこのようになったものであろう」と⁽¹⁸⁾ といった有様である。この事象を検討していくことが穂久邇本や諸本の成立背景の解明にもつながるのではないかという気がする。

穂久邇本で注目すべき点は、他諸本と大幅に異なる後半部である。藤井氏は「後半の部分が何らかの原因によって失われた伝本が存し、（中略）これに『義経記』を中心として、当時世に知られてゐた、橋弁慶伝説やその他も

取り入れて後を補作し、「弁慶物語」を作つた」と推測しているが、筆者も以下の事柄からこの説を支持したい。

穂久邇本を披見したところ、渡辺館での出来事「北国へぞ出にける」(前半結末部)と義経との出会い「さるほどにべんけいはほつこくにおもむかばやと思ひつ、」(後半冒頭部)の間に一〇センチほどの余白があることが判明した。本書において他にこのような現象が見られない中、この余白は大変示唆的である。波線部のように話に連続性は見出されることから、ここは親本の欠脱を示す単純な余白とは思えないのである。その中で話題展開に注目すると、余白以降の義経との対決をはじめとする後半部、諸本もまた多様化していることに気付かされる。既に触れた対決の場が清水近辺や五条橋といった違い、辻斬りをする人物が義経と弁慶という違い、僧正が谷での修行や島渡り伝説、鏡の宿での元服等。これらはすべて後半部にある。

こうした要素を総合的に勘案すると、穂久邇本の後半部は前半部と別系統の伝本・伝説、あるいは編集によるものと考えられること。また、『弁慶物語』の他の諸本は後半部の生成にあたり、諸本によってさまざまな伝承が採られ、まとめられたという推測に行き着くのである。穂久邇本後半部の欠脱した伝本の存在の可能性、あるいは場面や巻ごとの成立も視野に入れて考える必要があるか。そのことは後半の、特に義経との対決譚の多様性と符号しよう。穂久邇本は五条橋にて元服前の義経が辻斬りをし、弁慶との対決を迎えるという構図だが、この話は他本には採られなかったようである。さらに付言するならば、こうした種々の展開は義経に関するものがほとんどであり、それだけ義経伝説が多く流布していたことが改めて認められることにもなる。しかしながら右傍線部「何らかの事情」・「何らかの原因」を現時点

では明らかにすることは難しい状況である。

刊本類の後半部は東大本・国会本を主とする写本類と物語進行上大筋で一致し、共通の本文さえ持ちつつ話が進んでいく(刊本類の二人の対決は五条橋)。前半部においても、左のように穂久邇本にはない本文が刊本・写本類共にある本文を有している箇所も見られることから、その本文が穂久邇本直接に拠るものではないことを示す傍証となろう。

大東急 日本国より此山へのほりては かみをそる そかし

穂久邇

国会 日本国より当山にのほり かみをそりけるぞかし

大東急 御はうの太刀のきつさきかうしろにあたりつるか きれたるか(次行へ)

穂久邇

国会 彼御房の太刀のきつさき せなかにあたりつるは 切たるか

大東急 きられざるかといはんとするか あまりにあはて、

穂久邇

国会 きられぬ かといはんとするか あまりに周章

大東急 われらせんせのしゆくえんにて こんしやうはうとくの身となりたれとも(次行)

穂久邇

国会 我等先世の宿縁により今生 有徳の身と成て候へども

大東急 けふけふするせんちしきのおはしまさぬに

穂久邇

国会 可然 善知識 まましまさねは

つまり前半部が穂久邇本、後半部が他本という混態というよりは、穂久邇本本文を踏まえつつ全編を通じて本文が存する伝本が介在した可能性を指摘し

ておきたいのである。

以上、本書の考察は、穂久邇本のみに限らず『弁慶物語』生成の一端を探る契機となった点でも大変有益であったと言える。諸伝承の整理も含め、各諸本の編集姿勢についてはいずれ稿を改めて論じるつもりである。

(七) 慶大本について 付 東洋文庫蔵本について

最後に慶応義塾図書館本（慶大本）について触れておきたい。本書の製作時期も江戸初期までの製作と推定され、古色を残している。解題でも指摘されているが、錯簡も見られ、本文は写本系（国会本と近いとある）で、図はCBL本との共通点が見られる。⁽¹⁹⁾ 本文を検するに、大筋で国会本の系統と位置付けてよいが、東大本か国会本に拠るかは現存の本文では明らかにし難い。本書は人名の列挙や義経伝説・弁慶との対決に至る経緯等に簡略化が見られ、あらずじをたどるといふ傾向が見られる。これらは諸本に先行する原態に近い本文というよりは本書の製作にあたっての親本からの編集かと考えられるが、現存本文が少ないこともあり、その説明は今後への課題としておきたい。ただ、親本からの誤写や絵の挿入に併せた改変と見られる箇所も散見され、現時点では東大本よりは後出と見なしておきたい。残欠本だけにツレの出現があるかもしれない。また、CBL本と本書の図の共通性は、当時の絵巻生成背景や流布の状況を探る上でも貴重な資料と言えるだろう。

東洋文庫本は料紙五枚、四図による絵のみの残欠絵巻である。女房達が屋敷から門外を見る図（場面不明）、生まれて間もない弁慶を父の弁心が殺そうとする場面、山に捨てられた弁慶を見に来た使者が逆に追いかけられて逃げる場面、養父の五条の大納言が弁慶を養育する場面が見られる。室町末

江戸初期頃に絵師によって描かれたものと思われるが、ツレの存在は報告されていない。絵巻の一端として描かれたものであろうが、詞書もなく、現在のところ伝来や成立事情は不詳である。

六 おわりに

以上、写本類諸本の考察を行ってきた。写本にしてこれほどに多くの伝本を持つことは『弁慶物語』の人気のほどを物語っている。刊本としても多く刊行されたこともそのことを裏付ける。これまでに述べてきたように、『弁慶物語』は様々な要因が複雑に入り組み、諸本の系統を体系づけることは簡単ではないが、これまでの考察をもとにその試案を示したい。表は前掲松本氏の簡明目録に準じ、内容や物語の筋に相違のある大分類（ABC）、詞章に相違のある中分類（一二三）、細部に小異のある小分類（イロハ）によって識別した。数々の憶測を重ねてきたが、ここに大方の叱責を乞う次第である。

A 穂久邇本（一）

B（一）イ 大東急本（①）・東大寛永二〇年写本（一三）・井田氏本（一五）・石川氏本（一六）・大英本（一八）

（二）イ 慶大元和寛永頃古活字本（③）

ロ 島根県某家本（④）

（三） 東大等慶長元和古活字本（②）・天理奈良絵本（二〇）

（四） 早大本（⑤）・大阪青山奈良絵本（七）・京大奈良絵本（一二）

（五）イ 国会図書館等慶安四年製版本（⑥）

ロ 国会図書館貞享二年製版本(⑦)

C (一) 東大本(二)

(二) イ 大阪青山五卷本(五)

ロ 国会図書館元和七年写本(八)

(三) 大阪青山三卷本(六)

(四) 慶大本(一七)

(五) 京大本(一一)

(六) 岩瀬本(二〇)

D CBL本(三) + フォグ本(四) (もとは一具)

E 天理本(九)

F 東洋文庫本(一九)

注 * (一四) は未調査

(1) 「中世小説の研究」(東京大学出版会、昭和三〇年)には「武家小説」とある。

(2) 「書陵部紀要 第五三号」(平成一四年三月)。以下、「前稿」は同稿を指す。

(3) なお、脱稿後、「筑波書店古書目録 第80號」(平成一七年刊)に寛永・正保頃写とされる写本一冊が掲載されていることを確認した。

(4) 「お伽草子の世界」(三省堂、昭和五七年)所収。

(5) 以下、藤井氏の論は同書による。

(6) 昭和五三年三月

(7) 以下、池田氏の論は同書による。

(8) 前掲池田氏論考に詳細な考察あり。

(9) 「東横国文学 第30号」(平成一一年三月)

(10) 奈良絵本・絵巻に施された針穴についての考察は、伊藤慎吾氏「近世前期奈良本の本文製作―針目安をめぐる―」(『国語国文』六九―四号、平成二二年四月)に詳しい。

(11) 弁慶が義経を認める箇所は中巻では、弁慶が義経と認める場面で「これや

此おとにきくうしわかとのにてあるらん」と「けん九郎よしつねにてましますや」とある。また、義経自らは「うしわかまる」と名乗っている。下巻は義経で通っている。複数の採取源を示す痕跡か、編集の際の未整理的な名残であろうか。

(12) 徳田和夫氏「義経鞍馬山中修行伝説と判官物」(『お伽草子研究』所収 三弥井書店、昭和六三年)に詳しい。

(13) 徳田和夫氏は右書において「同一伝説も作品によって少しずつ形が違うということは、既に義経は室町初期には多様性を見せており、伝説記載の有無・多少をもって作品の成立時期の先後を論じるのは早計」と警鐘を鳴らしている。傾聴に値する御意見である。

(14) 他にも多数徳田氏指摘。「古典講読シリーズ お伽草子」(岩波書店、平成五年)参照。

(15) 石川透氏の御教示による。

(16) 「新日本古典文学大系55 室町物語集 下」213・240頁参照。

(17) 参考までに穂久瀬本では「一ぶつせうにおいては」とある箇所が大東急本では「一仏せうにをいては」とあり、東大本では「一部始終において哉」となっている。音(口語り)による伝承の痕跡であろうか。

(18) 『室町物語集 日本古典文学影印叢刊27』解題。平成二年、日本古典文学会編

(19) 第一図と第二図はCBL本・フォグ本共になく、確認ができないがこれまでの経緯を踏まえるとこの図もCBL本にあったと考えることができよう。

対校表一

ア	大東急	今	より以後	当	山	に心ざしあるとて	も	おさなき物一人もあくることあるへからす	にやく一殿一人に一山のせうを	むなくしたまふへきか		
	穂久邇	いまよりいごは	たうざんに心ざしある人	も	おさあひ人一人もとうざん	あるへからす		わか	一殿一人に一さんのしうそ	むなくしたまふへきか		
	CBL											
	天理											
	東大											
	国会											
	背五											
	背三											
	京大											
	岩瀬											
	イ	大東急	しよせん山	を出るより	はかなしとをのく	申ことにて候						
		穂久邇	そくたい	にて	てらをいてん	こそ本意	ならね	かみをそらはや	おやなれは	別当		
		CBL	どうぎやう	にて	てらをいでん事	こそほんらね	かみをそらばや	おやなれは	おやにてまはせはくまの、へつたう	べつたう		
		天理	わらはのかたちにては						おやにてまはせはくまの、へつたう	へんしんもおそろし、		
		東大	いかてかちこ	のすかたにては					おやにてまはせはくまの、へつたう	へんしんもおそろし、		
		国会	いかゞ	わらわのすかたにては					父にてまはせは熊野別当	親にてまはせは熊野別当		
		背五	いか、	わらわのすかたにては					おやにてまはせはくまの、へつたう	おやにてまはせはくまの、別当		
		背三	いて	とうきやう	にては				おやにてまはせはくまの、へつたう	もおそろし		
		京大							おやにてまはせは	をやにてまはせは		
		岩瀬	いかて	わらはのすかたにては					をやにてまはせは	へんしんもおそろし、		
		ウ	大東急	ちうたうかいと申は	ぬすみせぬ事か	(次行へ続く)						
			穂久邇	ちうたう	は	ぬすみする事か	べんけいかぬすみをしてはいかゞあるべき					
			CBL	ちうたうかいと申は物	をぬすまぬ戒	ござんなれ	せんしやうけんどのこ	により				
			天理	ちうたう戒	と申は物	をぬまぬかいなり	まつ		けんどのこ	うりきををしらしめ		
			東大	偷盗戒	は物	をぬすまぬ戒	そかし		懼	食の業力	しからしめて	
			国会	ちうたうかい	はもの	をぬすまぬ戒	そかし		けんどのこ	うりきのしからしむる所	前生	の果報
			背五	ちうだうかい	は物	をぬすまぬかい	そかし		けんどのこ	うりきのしからしむる	ところ	せんしやうのくわほうは
			背三	ちうたうかい	はもの	をぬすまぬ	事		けんどのこ	うりきををしからしめ		こんしやうのくわほうは
			京大	ちうたう戒	はもの	をぬすまぬ戒	そかし		こんしやうのくわほうは	ひんふくとも	さたまれる	

岩瀬 抑ちうたうかい は物 をぬすまぬかいこさんなれば それ けんとのこうりきによつて たしやうのくわほう きたまれりといへとも

大東急

穂久邇

CBLなをもつてとせいにかなはず くわこのつみ にさんけして まつ 仏しん にいのるへし た、しゑいけきかさんらく にはひん をもつてたい一 としける
 天理 なをもつてとせいにかなはず くわこのさいこうは さんけして けんさいを いのるへし た、しゑいけきかさんらく にはまとしきをもつてたのしみとす
 東大 猶以 度世 になははずは 過去の罪 にさんけして 現在を仏 にいのるへし 但 榮 啓期が三 榮 の一 には貧 を以 樂 とす
 国会 過去の罪 はさんげしつ 現在を仏 にいのるへし 但し 榮 啓期が三 榮 の一つにはひん を以 たのしみとす
 背五 くはこのつみ はさんけしつ けんさいをほとけ にいのるへし た、しゑいけきか三 らくの一つにはひん をもつてたのしみとす
 背三 なをもつてとせいにかなはずは 過去の つみ をさんけして けんさいをふつしんにいのるへし た、しゑいけきか三 らく にもひん をもつてたのしみとす
 京大 なをもつてとせいにかなはずは くわこのさいこうをはさんけして けんさいを いのるへし た、しゑいけきかさんらく にもひん をもつてたい一 とす
 岩瀬 なをもつてとせいにかなはずは くわこのさいこうをはさんけして けんさいを いのるへし た、しゑいけきかさんらく にはひん をもつてたのしみとす

エ 大東急

穂久邇

CBLおしむところかにくければ けんとりりやくのこらさむかために いてはきてきんする物をとおもひ わ御はうは ころもやおしきいのちやおしき
 天理 けんとりりやくのこらさむかために いてはきてきんする物をとおもひ わ御はうは ころもやをし いのちやをしき
 東大 おしむ処 かにくければ且 は懼 食 利益 のため 態 と其 衣 をと て着するそ 衣 やおしき命 やおしき
 国会 おしむ所 かにくければ且 はけんどん利益 のためなれば わざとその衣 を取 てきんぞ 御房 よ猶 もぬがぬものならば衣 やおしき命 やおしき
 背五 をしむところかにくければかつうはけんどりりやくのためなれば わざとそのころもをとつてきんぞ 御ほうよなをもぬかぬものならばころもやをしきいのちやおしき
 背三 おしむところかにくければかつうはけんとりりやくのため わざとそのころも とりてきんするなり ころもやおしきいのちやおしき
 京大 おしむ心 かにくければ けんとななるものをこらさむかためにわざとそのころもをたまはるへし ころもやをしゑいのちやおしき
 岩瀬 おしむ所 かにくければかつうはけんとりりやくのそのために わざと其 衣 をとつてきんするそ ころもやをしゑいのちやおしき

オ 大東急

穂久邇ナシ

CBLしたに まきらかして た、ろんろんといひ のちにはくれんくといひ て しゆすを しすりて 腰 におさめ
 天理 したに ままらかして んんくといひける くれんくといひ て しゆすを しすりて
 東大 舌 に まきらかして 論々といひて 後 にはくれんくと廻向 して 念珠 さらくとおしのみ て腰 におさめ
 国会 したにまきらかして 論々といひて 念誦 さらくとおしのみ てこしにおさめ
 背五 したにまきらかして んんくといひて しゆす さらくとおしのみ てこしにおさめ
 背三 くちに まかせとなへつ、 んんくといひて のちに くれんくとまかうして しゆすは さらくとおしのみ てこしにおさめ
 京大 したに まきて んんくといひて のちに くれんくとまかうして しゆす さらくとおしゆすつてこしにおさめ

岩瀬 したに まきらかして ろんくといひ のちにはくれんくとまかうして しゆす さらくとおしもみ てこしにおさめ
 慶大 した まきらかして ろんくといひて のちにはくれんくとまかうして ねんしゆ さらくとおしもみ こしにおさめ
 カ 大東急 かうそめの衣 におなしいろのけさかけて こしにのりてそくたられる

穂久邇 (ナシ)

CBL けいしゆんは

天理 けいしゆんはかう の衣 にかう のけさ はんしやうそくのしゆすもちて

東大 (欠脱)

国会 慶俊 は香 の衣 に同 袈裟かけて双長 の念珠 つまぐりけるか 馬引 よせ 打乗 て多 くの武士に守 護せられ

背五 けいしゆんはかう のころもにおなし けさかけてさうなが のねんじゆつまぐりけるか むまひきよせ うちのりておほくのふしにしゆこせられ

背三 (欠脱)

京大 けいしゆんは

岩瀬 その身 はかう のころもに けさかけ みさうはん のしゆすにあふきもち むまにうちのり おほくのふしにしゆこせられ おくのふしにしゆこせられ

対校表二

ア CBL

天理

東大 つん ときつておとし 四五度する ありつる程 は中々 おそろしかりつるに 今 はたすかりたり損 の事も思 はす

国会 すんくに切て落し 四五度する 有つる程 は中々 おそろしかりつるに 今 はたすかりたり損 の事もおぼえず

背五 づん ときりておとし はしりありくを ありつるほどはなかくおそろしかりつるに いまはたすかりたりその事もおぼえずといふ

背三 きりておとしけり

京大 すんくにきり おとし おとりまわりけねありさまを いのちをひろいたりけりてけふさめてそいたりける

岩瀬 つんと きりたりける いまはあんとの思をなし 大いきついでいたりけり

イ CBL

天理

東大 随 喜利物 の雲 さはくといへとも 本有の大虚に動 転もなくおしたて ことから仁 体にて弁 舌 利口の上手也 ければ

国会 随 喜利物 の雲 さわぐといへども 本有の大虚に動 転なくおしたて 事から仁 体にて弁 舌 利口の上手成 ければ

背五 すいきりもつのかもさはぐといへとも ほんうの大きよにとつてん なくおしたて、事 からじんたいにてべんせつりこうの上手なりければ

背三

京大

岩瀬

ウ CBL

くちはきいたり きやうろんしやうきやうにはくらきかなし

天理 じんじやくせらくむうゑしん 三 かいむあんゆによくわたく
 東大 噫 深 着 世 樂 無 有 恵 心 三 界 無 安 猶 如 火 宅 四 日 と 申 行 帰 て あり の ま、 申
 国会 あ、深 着 世 樂 無 有 恵 心 三 界 無 安 猶 如 火 宅 四 日 と 申 行 帰 て 此 由 申
 背三 あ、しんじやくせらくむうゑしん 三 がいむあんゆによくはたく 四 日 と 申 行 か へ り て こ の よ し 申
 背五 しんぢやくせらくむうゑしん さんかいむあんゆによくわたく 四 日 と 申 行 せ か へ り こ の よ し 申
 京大 四 日 と 申 行 せ か へ り ち し や う や け て る よ し を 申 あ ぐ る
 岩瀬 すこしもたかわすゑんしやうしけり たちかたなをかたはしよりうはいとりて

対校表三

ア CBL かくもんをも 御心に入られ ほとけのゑみやうをもつき給はん こそ
 天理 いよく しゆかくのおもひにこゝろを ふつしんにたてまつるこゝろをきやうせんにごそ かれこれさうをうして
 東大 いよく 修学のおもひ心 を 仏神 奉公し給ふ にごそ 彼是相応して
 国会 いよく 仏法修学の思 をなしたまわんこそ 尤 目出度かるへきに
 背五 いよく ぶつほうしゆかくのをむひ をなしたまはんこそ もつともめてたかるへきにて候
 背三 いよく しゆかくの思 ひにこゝろを

京大 かくもん に御心をいれ ぶつしんにほうかうし給ひて こそ かれこれもつて めてたかるへきに
 岩瀬 いよく かくもん に御心をいれ ぶつしんにほうかうし給ひて こそ かれこれもつて めてたかるへきに
 イ CBL かくもん に御心をいれ ぶつしんにほうかうし給ひて こそ かれこれもつて めてたかるへきに (次行へ)

天理 公卿 房とやいわれまし 殿上 房とやいわれまし それも余に事々し ほうしはくになをつくならないあり
 東大 公卿 房とやいわれまし 殿上 房とやいわれまし それも余に事々し 昔 奈良法師に悪僧有 その名を武蔵房と云しそかし
 国会 卿の公とやいわまし 宰相とや名付くべき いやくそれもおそれあり 昔 奈良法師に悪僧有 その名を武蔵房と云しそかし
 背五 きやうのきみとやいはまし さいしやうとやなつくほき いやくそれもおそれあり 昔 奈良法師に悪僧有 その名を武蔵房と云しそかし
 背三 京大 京大 ぐきやうはうとやいはれん てんしやうはうとやなのるへき いやくそれも ことくし
 岩瀬 岩瀬 ぐきやう坊とやいはれん てんしやうはうとや名乗はや それもあまりにことくし

CBL さいたうのむさしはうとなのるへし
 天理 西塔 武蔵 とよはれん
 東大 西塔 武蔵 とよはれん
 国会 とて 西塔の武蔵房と名乗てはよかりつべしとて 武蔵房とそ名乗ける
 背五 とて さいたうのむさしはうとなのりてはよかりなん とて むさしはうとそなのりける
 背三 むさしはうは よかりなん

京大 さいたうのむさし とよはれなん
岩瀬 さいとうのむさしはうとよはん

ウ CBL 御さうし 御らんして ちらりとほつし 八しやくつひちをひらりとほねこえたまへは

天理 御さうし 御らんして ちやつとはつして 八しやくついちをひらりとほねこえ給ひけり へんけいあたりを見まわせとも

東大 御曹子にはしりむかひて 弁慶 か右 手の小わきより 後 へつ とぬけ給 寄返して 見れば 人もなし 弁慶 あきれて

国会 御曹 司に走 りむかひて

青五 御さうしにはしりむかひて

青三 よしつねにはしりむかひて へんけいかゆんでのこわきより うしろへつとぬけ給 ふうしろをかへり 見れば 人もなし へんけいはあきれて

京大 御さうし 御らんして むさし かゆんでのこわきより うしろへふつとぬけたまひ すこしもめには見へたまはず 弁慶 あきれて

岩瀬 かひちかふて 弁慶 かゆんでのこわきをく、つてうしろへぬけ給 よりかへり みれば 人はなし 弁慶 はあきれて

エ CBL むまのみつつきに とりついでとうさいをきつとにらみまはし (次行へ、東大・青三はこの部分ナシ)

天理 馬 のみつつきに とりつき とうさいをきつとにらみまはし

国会 馬 の七寸 に無手と取付 東西 を にらみまはしたり 是 をみる人 ありがたいかめと 勢 の大きなる法 師や 長 の高き山伏 かなと云 ける

青五 うまのみづつきにむすととりつき とうさいを にらみまはしたり これをみる人 ありがたいかめしと せいの大きなるほうしや たけのたかき山ふしかなといひける

京大 御むまのみつ、きに すかり申 とうさいを にらみまわして

岩瀬 みつつきに とりつき とうさいを にらみまはし

CBL とも けいしゆんはいつくへ御いり 候そ

天理 とも けいしゆんはいつくへ御いり 候そ

国会 あまりの事 にや 武蔵 房 とはしらざりけり 只 あきれてぞ候ける や、有て 抑 慶 俊 はいづくへ御わたり候ぞ と申ければ

青五 あまりのことにや むさしはうとはしらざりけり た、あきれたるはかりなり ややありて ともともけいしゆんはいつくへ御わたり候そ と申ければ

京大 さても けいしゆんはいつくへ御いて 候そ と申す

岩瀬 さもあれけいしゆんはいつくへ御入 候そ と申

対校表四 ア CBL たちをこうて くれんところをとつてひきよせ ぐみふせていまのいこんをさんせんとおもひ わかものなれはおしきなり たひ給へ とそ申ける

天理 たちをこうてみてくれんところをとつてひきよせ ぐみふせていまのいこんをさんせんとおもひ わか物 なれはをしきなり たひ給へ とそ申ける

東大 我物 なれはおしきなり

国会 我物 なればおしいぞや

青五 わかものなれはほしいぞかし

青三 わかものなれはほしきぞかし

京大 我物 なれはほしいぞかし

京大 わかものなれはほしきぞかし

京大 我物 なれはほしいぞかし

京大 わかものなれはほしきぞかし

岩瀬

かたなほほしひ

といひければ

イ CBL みちよりかみにおこたり

きやうさかもをたつねけるに

ひまもあらはとおもへともさらにゆたんのみへされは そこをもゆへなくのかしけり

天理 みちよりかみにおこたり申

きやうさかもをたつねあるきけるは

ひまもあらはとおもへともさらにゆたんのみへされは そこをもゆへなくのかしけり

東大

京 の方へ 行

いか、せんとそ恨 たる其 気色 しらぬていにもてなし(以後、法性寺にての対決)

国会

京 のかたへ

いか、せんとぞ打 見たる其 気色 しらぬていにもてなし(同右)

青五

きやうのかたへ

ゆく いか、せんとそうちみたるその気色もしらぬていにもてなし(同右)

青三

きやうのかたへそ

ゆきにける いか、せんと うちみて しらぬていにもてなし(同右)

京大

きやうのかたへそ

いてにけり いか、せんと 思ひしか しらぬていにて (同右)

岩瀬

きやうの方へ

ゆきにける いか、せんと 思ひつ、

ウ CBL そのまに御さうしのふせいをよく見れば

人に一やうかはりて まなこのうちさしあらはれ

むかはすこしそりいて、いろしろうくて けたかくこそ(次行へ)

天理 そのまに御さうしのふせいをよく見れば

人に一やうかはりて まなこのうちさしあらはれて

むかはすこしそりて いろしろうくて あくまでけたかく

CBL まし／＼けれ

もちたまへる御はかせはこかねつくりとみなして うは、ん事はいとやすしとて

あら／＼ねをひさしたりける これを しようさんに(次行へ)

天理 まし／＼ける

もちたまへる御はかせ こかねつくりと見なして

うはわん事一ちやうにて あら／＼ねをひさしたりける このたちをしようさんに

CBL まいらせたら

は

一はうのさうりうのさしあわせにはなる へし

天理 まいらせてあれならば

一はうのさうりうのさしあわせにはなりぬへし

E CBL へんけい

おもふやう かりそめながら 此くわしやかきつてのやうのおもしろさよ ほめはやと思 じて あきつたりやくくわんしやと二三とはめてその、しり(次行へ)

天理 へんけい心におもふやう

かりそめながら 此くわしやかきつてのやうのおもしろさよ ほめはやと思 じて あきつたりやくくわんしやと二三とはめてその、しり

CBL したんの大たちをするりとぬき

あますましとてか、りけり 御さうし御らんして 何のしゆくいそ御はうよ しゆつけのすかた なれはいのちをはたすくるそ(次行へ)

天理 したんの大たちをするりとぬき

あますましとてか、りけり 御さうし御らんして 何のしゆくいそ御はうよ しゆつけのすかた なるに かへつてわれを(次行へ)

CBL はやまかりのけとおほせある

へんけいこれをきくよりもなをやすからすおもひて わおとこのいのちをたすけ たすけしはこのほうしかま、なるに かへつてわれを(次行へ)

天理 はやまかりのけとおほせある

へんけい是をき、 なをやすからすおもひて わおとこのいのちをたすけ たすけしはこのほうしかま、なるに かへつてわれを

CBL ゆるさんとや

ことはのせうふはむやくなり まいり候 といふま、に すきまもなくそか、りける 御さうしは くらまのおく そうしやうかたにて(次行へ)

天理 ゆるさんとや

ことはのせうふはむやくのこと まいるなりとて か、りける 御さうし もとよりもくらまのおく そうしやうかたにて(次行へ)

CBL

ひやうほうをはきわめつ へんけいは さんてうにかくれなきたちにはしやうすなり せんとやすりと いはとかねのことくにてつはかねをならし(次行へ)

天理 てんくにあひひやうほうを

きわめ給ふ人へんけいと申もさんてうにかくれなきうち物の上 すなり せんとやすりと いはとかねのことくにてつはかねをならし

CBL しのきをけつり

はんしかほとこそた、かひけれ へんけいかうつたちは御さうしのこしのあたりをすきまもなくそみへにける 御さうしの御はかせのきつききは(次行へ)

天理 しのきをけつり

はんしかほとこそた、かひけれ へんけいかうつたちは御さうしの あたりをすきまもなくそみへにける 御さうしの御はかせのきつききは

CBL へんけいかくひのあたりをひまなくこそはひらめきけれ

御さうしおほしめすは 此 御はうかくひうちおとさんはやすけれとも きやつはしさひもなき(次行へ)

天理 へんけいかくひのあたりをひまなくこそはひらめきけれ

御さうしおほしめしけるは この御はうかくひうちおとさんとおほしけれと きやつはしさひもなき

CBL こはものなり

いのちをたすけをき

めしつかはんとおほしめし

天理 らうとうなり いのちをたすけをきて つかはんとおほしめし

CB L へんけいもなきなたのさやをはつし いまをかきりのしようふとて こころをさいことた、かひけり 御さうしもいまこそしうくのさたむ しようふなれはとて (次行へ)

天理 へんけいもなきなたのさや はつし いまをかきりのせうふ とて こころをさいことた、かひける 御さうしもいまこそしうくのさたむるせう ふなれはとて

CB L ひしゆつをつくしてた、かひ給ふいつしようふあるへしもみへさりけり さうへさつとひきのき しはらくいきをつき へんけいこころにおもふやう いかさまこれを (次行へ)

天理 ひしゆつをつくしてた、かひ給ふ せう ふあるへしもみへさりけり さうへさつとひきのき へんけい心 におもふやう いかさま是を

CB L けん九郎よしつねにてましますや さなくてはおほへす (中略) このたひ しようふを (次行へ)

天理 けん九郎よしつねにてましますや さなくてはおほへす (中略) このたひはせんあくせうふを

CB L つけんするに むたひにわれもうちしにしてのちに たれともしらさんむねなるへし たかいにみやうしをなれるへし なのりたまへといひければ 御さうし (次行へ)

天理 すくすへし しかれとも うちしにして後 は たけともしらさん無念 なるへし たかひにみやうしをなりてせうふをせん とそ申ける 御さうし

CB L きこしめし たれもきこそはおもへとてまつ御さうしなりの給ふ われはこれ六そんわうに六たい た、のまんちうに三たい しもつけのさまのかみよしとの御こ (次行へ)

天理 きこしめし なのり給ふ 我 は是 六そんわうに六たい た、のまんちうに三たい しもつけのさまのかみよしとの御子に

CB L うしわかとは我事なり ようせうのときよりくらまのてらにのほり かくもんし その、ちくらまのおく そうしやうかたに、ててんくにあひ ひやうほうの (次行へ)

天理 うしわかとは我事なり ようせうのときよりくらまのてらにのほり かくもんし 其後 くらまのおく そうしやうかたに、ててんくにあひて ひやうほうの

CB L はうせうをきほめし われなり となのりたまふ

天理 あうせうをきほめし われなり となのりたまふ

村校表五

フオグ むさしはう心のうちに思ふは あ はれわれなからくわほうはあるものかな このあひた 御さうしの御とも申 の山を いへとすれば はんしゆを (次行へ)

天理 むさしはう おもふやう あつはれわれなからくわほうはある物 かな このあひたは御さうしの御とも申 の山を いえとすれば はんしゆ

国会 武蔵 房 心 中に思 様

青五 むさしはうしん中におもふやう

京大 むさしこれを見て かほと くわほうめてたき事よもあらし このあひた 御さうしにつきそい申 のやまをのみいとすして いひもさげをも

岩瀬 弁慶 思うふやう 我ほと くわほうの物はなし 御さうしの御ともして の、すへ山のおくにてすまひしに しゆはんに

フオグ 心にまかせず かほと ねんころなるさつしやうをえつる事のおもしろさよ これもきみの御ためし のためにいのちをすつるゆへそかし

天理 心にまかせず かほと ねんころなるさつしやうをえつる事のおもしろさよ これもきみの御ためし のためにいのちをすつるゆへそかし

国会 心にまかせず かほと ねんころなるさつしやうをえつる事のおもしろさよ 是 もきみの御ためし のためにいのちをすつるゆへそかし

青五 心にまかせず候ひしに かやうにけつこうなるさつしやうをえつる事のためたきよ これもし の ためきみのためにいのちをすつるゆへそかし

京大 心にまかせず候ひしに かやうにけつこうなるさつしやうをえつる事のためたきよ これもし の ためきみのためにいのちをすつるゆへそかし

岩瀬 あふ事まれなりしに これは ねんころなる事かな これもしせうの御ために命をすてしとそかし